

# 救護棟カルテ No. 2



春から小鳥たちが賑やかだった入院室は、秋になりや  
っと落ち着いてきましたが、今年も南下に間に合わな  
かったツバメが4羽残されてしまいました。来年春の野生  
復帰を目指して、越冬に入ります。

前号で紹介したノスリは無事野生復帰しました！

## チョウゲンボウが野生復帰しました！

7月中旬、喜多方市内で交通事故に遭ったチョウゲンボウが保護されました。

診断は右翼横尺骨の骨折で、すぐに処置が施されました。骨折した骨の髄内にピンを通してつなく修復手術です。



入院直後



手術の様子



手術後

手術は吸入麻酔を使用し、なるべく苦痛をやわらげます。ピンを入れた後はテーピングしてしばらく安静を保ちます。  
事故から発見、搬送、処置がスムーズだったこと、傷口が開放しておらず出血が少なかったことが幸いでした。経過は  
きわめて順調で、餌もよく食べ、みるみる体力は回復していきました。

そして手術から2週間後の再診で、骨をつなっていたピンを除去、テーピング  
も外されました。翼を触ると、骨折していた部位がわからない程にキレイに修復  
されているのがわかりました。ただ、安静をとるために関節を固定していたため、  
翼の動きは悪くなっていました。治療は終了、これからリハビリが始まります。

数日様子を見たのち、屋外の訓練場へ移動されました。しばらくはうまく飛び  
ことができず、地面を走ったり、ジャンプして枝に跳り乗ったりしていました。

翼のケガ自体も、もちろん飛べない原因となりますが、狭いダンボールで  
じっとしていたことによる筋力の低下と、水浴び・羽繕いがうまくできてい  
ないことによる浮力の低下も大きな要因です。

しかし心配も束の間、日が経つにつれ動きはどんどん良くなり、一週間も  
経つと違和感はすっかり消え、見事な飛翔を見せてくれるようになりました。  
野生動物の生命力にはいつも驚かされるばかりです。

そして8月末、チョウゲンボウは故郷の喜多方の空へ帰っていきました。

上空を気持ちよさそうに旋回しながら、その美しい姿を私たちに見せつけるように飛んでいきました。



訓練場にて



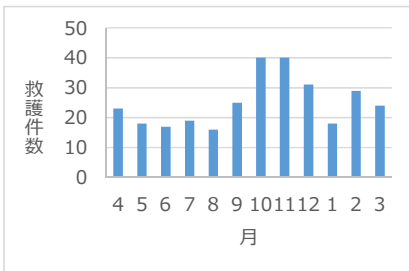
放鳥の瞬間

## 交通事故が増える季節です！

9月に入り、交通事故に遭った子ダヌキがたて続けに搬入されま  
した。今年生まれた幼獣が親元を離れ、新たなすみかを求めて分散  
する季節です。また、春夏に比べて少なくなった餌を求めて活発に  
なるため、秋から冬にかけて野生動物の交通事故が増加するといわ  
れています。グラフは平成16年以降に交通事故が原因で保護された  
哺乳類の月別の数です。夜道の運転に、今一度ご配慮をお願いします。

現在、野生生物共生センターでは館内で「野生動物と交通事故」

に関する企画展示をおこなっております。この機会に一緒に考えてみませんか？目撃情報もぜひお寄せください！



平成29年11月1日 福島県環境創造センター 附属 野生生物共生センター

# あたら 森の回覧板



## 【秋のイベント情報】

野生生物共生センターでは、10月21日(土)～11月26日(日)の期間中に、国立科学博物館の巡回展と  
して「ダーウィンを驚かせた鳥たち」を開催します。

自然科学者ダーウィンが進化論を考え付くヒントになったとされる鳥「ダーウィンフィンチ」について精巧なバ  
ードカービングを用いて紹介します。くちばしの形状や体の大きさ等を比較して、ダーウィンフィンチの進化につ  
いてお伝えします。



また、11月5日(日)には、国立科学博物館の西海功先生にお越しいただき、「ダーウィンとガラパゴス諸島の  
フィンチたち」との題名でご講演をいただきます。



**日時** : 平成29年11月5日(日) 11時00分～12時00分  
(10時30分より受付開始)  
**場所** : 安達郡大玉村玉井字長久保67 野生生物共生センター  
**備考** : 参加無料、**要事前予約(申し込み方法はお問い合わせ下さい)**  
**主催** : 野生生物共生センター  
**共催** : 独立行政法人国立科学博物館  
**協力** : 全国科学博物館協議会、(一財)全国科学博物館振興財団

### 西海 功 博士 (理学)

国立科学博物館動物研究部 脊椎動物研究グループ研究主幹、日本鳥学会会長  
近著に「レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 2 鳥類 環境省編 ぎょうせい」(分担執筆)、「鳥類  
分類表. 岩波生物学辞典 第5版 岩波書店」、「行動生物学辞典 上田恵介他編 東京化学同人」(分担執筆)など

野生生物共生センターでは、野生動物の剥製やパネルの展示、映像放映等をおこなっており、入館料無料で自由に見学・閲覧できます。  
救護棟、野外訓練場は立入禁止ですが、屋内訓練場にて野生復帰訓練をおこなっている場合は、観察コーナーからその様子をご覧いただけます。  
詳しくは...

**発行: 福島県野生生物共生センター**  
〒969-1302  
福島県安達郡大玉村玉井字長久保67  
電話 0243-24-6631  
(9:00～17:00 月曜休館日)



## 夏休みイベント報告

野生生物共生センターでは、夏休み期間中にサイエンスカフェとワークショップのイベントを開催しました。

### ☆サイエンスカフェ

環境創造センターで野生動物を研究している研究員を招き、生きものに関する話として、クマの生態や水生昆虫について30分程度ずつ話をしました。

クマの話では、日本クマネットワークから借り受けたツキノワグマトランクキットを用いて、クマの習性や他の哺乳類との違い（足の指が5本あること、足跡に踵までつくこと等）を説明しました。

水生昆虫の話では、前日に採取したトビケラ等の水生昆虫を実際に観察しながら、その生態や人との関わりについて説明しました。研究員からの説明の後には、参加者の方から様々な質問が飛び出していました。

7月17日（月）と8月13日（日）の2日間開催し、各回わずか1時間程度の開催時間でしたが計100名以上の方にご参加いただきました。



### ☆ワークショップ

7月15日（土）～8月24日（木）の間、親子で楽しんでいただけるようなワークショップを毎日開催しました。

#### ・鳥の羽ワークショップ

鳥の羽の形や細かい構造について、観察しながら理解を深められる内容になっています。拾った羽を投げてみた時の落ち方から、どの部位の羽が特定したり、羽枝と呼ばれる羽の細かい構造を顕微鏡で観察した後、マスキングテープとストローで自分だけの羽を作成しました。本物そっくりの羽や、オリジナルの色鮮やかな羽など様々な羽ができました。



#### ・鳥のくちばしワークショップ

鳥のくちばしの形と食性（エサ）の関係について学べる内容になっています。タカ、カワセミ、ハクチョウ等の剥製を観察しながらくちばしの形をスケッチし、エサのシールを貼って自分だけの図鑑を作っていました。



## 愛鳥週間ポスターコンクール優秀作品展示

毎年5月10日～16日の期間は愛鳥週間と定められており、県では自然保護の大切さを県民に広く浸透させるため、県内の小・中学生の皆さんを対象に、愛鳥週間ポスターコンクールを実施いたしました。

10月10日（火）～11月10日（金）の間中は野生生物共生センターにて優秀作品（計20点）を展示する予定です。小中学生が描いた鮮やかな鳥たちのポスターをぜひお越しになってご覧ください。

なお、入賞作品のうち、小学生の部・中学生の部、上位各3点については、(公財)日本鳥類保護連盟が主催する平成30年度愛鳥週間用ポスター原画コンクールに福島県代表として推薦されます。



## 業務紹介 第二回 「野鳥の異常死の原因究明」について

野生生物共生センターでは、野鳥が同じ場所で一度に多数死亡するような大量死や不審死など、いわゆる「異常死」があった場合には、その原因究明のための検査や調査をおこなっています。野鳥の異常死でまず疑われるのは鳥インフルエンザですが、その他にはどのようなものがあるのでしょうか、国内の主な報告を【表】にまとめてみました。

【表】のとおり、野鳥の異常死の原因として、ウイルス・細菌・真菌・寄生虫といった感染症から、化学物質による中毒や腫瘍、衰弱など様々なものが報告されています。

ウイルスや細菌・真菌による感染症には、野鳥から人や家畜・ペットへ感染する「人獣共通感染症」や「家畜伝染病」と呼ばれるものがあり、また、農業などの化学物質も人や家畜・ペットに害を及ぼす可能性があります。

野鳥の異常死を発見した場合に、これらのリスクを回避し、人や動物の安全・安心の確保に役立てるため、その原因を究明することも大事な業務のひとつです。

種名	診断名	病原体等
オジロシ、トビ、ドバト、オオジュリン、スズメ、ハシブトガラス、ハシボソガラス	ボクスウイルス症	ウイルス 鳥類のボクスウイルス
マガン	マレック病	ウイルス マレック病ウイルス
ハシブトガラス	鳥インフルエンザ	ウイルス 鳥インフルエンザウイルス
ドバト	ハトヘルペスウイルス感染症	ウイルス ハトヘルペスウイルス
スズメ	サルモネラ感染症	細菌 <i>Salmonella Typhimrium</i>
スズメ	ブドウ球菌感染症	細菌 ブドウ球菌
ハシブトガラス	急性出血性腫瘍	細菌 <i>Clostridium perfringens</i>
タンチョウ、ツル類	アスペルギルス症	真菌 <i>Aspergillus</i>
ハシボソガラス	深在性真菌症	真菌 鳥類アスペルギルス様真菌
スズメ	塩中毒	中毒 融雪剤
ハト、ヒヨドリ、ツグミ	農業中毒	中毒 有機リン系農薬
セグロカモメ	綿維肉腫	腫瘍
ハシボソミズナギドリ、ホシハジロ	衰弱	栄養障害

【表】国内における野鳥の異常死

では、実際に検査した症例をご紹介します。

参考資料：Avian Pathology(2004)、Bird Research(2014)、病原微生物検出情報(2007)、動物衛生研究所研究報告(2005)、Japanese Journal of Ornithology(1986)、Journal of Veterinary Medical Science(2006)、神奈川県衛生研究所研究報告(2003)、日本野生動物医学学会誌(2007)、酪農大学紀要(2003)、Veterinary Pathology(2006)

### 【症例】有機リン系農薬中毒が疑われたカラスの大量死

#### 経過

2017年2月、X市内の畑地や民家敷地内を含む約200m四方の範囲に、衰弱または死亡したハシボソガラス23羽が確認されました。衰弱した個体では、嘔吐・翼や脚の脱力・のけぞり姿勢などの症状が見られました。検査のため、衰弱個体5羽、死亡個体3羽を野生生物共生センターへ搬入しました。

#### 検査結果

高病原性鳥インフルエンザは簡易検査、遺伝子検査ともに陰性でした。剖検で、死亡個体3羽中2羽の胃の中に、白い粒状やクリーム状の内容物が認められました。胃内容物について福島県衛生研究所へ農薬検査を依頼した結果、有機リン系農薬のシアノホスが40～123μg検出されました。

#### まとめ

今回の症例では、臨床症状や剖検結果から毒物による中毒死が疑われ、検査で有機リン系農薬のシアノホスが検出されました。過去に、野鳥でシアノホスによる中毒死と推定された事例として、神奈川県衛生研究所研究報告にヒヨドリとツグミの症例がありました。そこで検出されたシアノホスは103～191μgでした。

カラスの致死量に関する知見がないため本症例の死因がシアノホスであると断定は出来ませんが、カラスが誤って農薬を摂取してしまったことは確認出来ました。

平成28年度には、この症例を含めて4件の大量死について検査を実施し、農薬中毒のほかに細菌性腸炎が疑われた症例もありました。これらは、場合によっては他の野生動物や人・家畜・ペットへ被害が及び可能性も考えられます。

野生生物共生センターでは、今後も野鳥の異常死に遭遇した場合には、関係機関の方々と協力して迅速に対応することで、他の野生動物だけでなく人・家畜・ペットへの被害を防止し、人と野生動物がより良い関係を築く一助となるよう努めていきたいと思っています。



写真1 カラスの複数の死体



写真2 くちばしに吐物が付着